

News Letter

STS Network Japan

Vol.10, No.2 (1999)

夏の学校のお知らせ	p2
ワークショップのお知らせ 「21世紀の科学技術と日本社会 科学技術政策と新たな産官学関係」	p5
スティーブ・フラー氏講演会のお知らせ 「科学の統治：開かれた社会の未来」(仮題)	p6
高度情報社会、インターネットを考えるコンセンサス会議の経過 木場隆夫	p7
STS Network Japan Yearbook・論文投稿規定	p8
S T S 情報	p10

STSは、Science, Technology,
and Society の略称です。

99夏の学校 「人文社会科学とSTS」

参加者募集中！

期間	1999年 7月 24日 (土) ~ 26日 (月)
会場	関西地区大学セミナーハウス (神戸市北区道場字ロクゴ318-2 電話 078-985-4391) アクセス: JR福知山線(宝塚線)三田駅下車 神戸電鉄有馬温泉駅行きバス平田バス停下車 徒歩15分 JR福知山線(宝塚線)道場駅下車 徒歩30分(ハイキングコース) 神戸電鉄有馬温泉駅下車 三田行きバス平田バス停下車 徒歩15分 送迎バス: JR福知山線(宝塚線)三田駅 7/24 14:30発 開場発 三田駅行き 7/26 12:30発
予算	¥13,000程度 (一泊、二食で¥6,500程度。後日正式にお知らせします)

'99「夏の学校」のテーマは「人文社会科学とSTS」となっております。しかし、このタイトルから導き出されるイメージは各人により千差万別なことでしょう。今回の夏の学校では、以下の二つの方向性からプログラムを組み立てていく方針です。

まず第一に、近代国家を語る上でその存在を無視できない社会科学に対するSTSを考えてみるという切り口、すなわち、自然科学に対するのと同じように社会科学に対してもthird opinionを提示していけるようにしよう、という観点からのSTSの可能性を検討します。

第二に、STSは科学技術に対する人文社会学的研究のひとつであるという観点から、人文社会科学とSTSが互いから何を学ぶうかについて方向性を探ります。社会科学(社会学・政治学・経済学・法学など)・歴史・文学・哲学など従来の人文社会科学的領域からSTSが何を学び、また、それらの領域にこれから何を提示していけるのかを考えます。

人間の知がどのように科学・技術・社会をめぐる問題に関わってきたのか、人間の知がどのように科学・技術・社会をめぐる問題に関わってきたのか、そしてその中でSTSはどのような役割を果たしていけるのか。これを機会に幅広い議論と多様な価値観の出会いが行われる場を提供したいと思っています。

去年に引き続き今回もSTSNJ会員の塚原東吾氏にご尽力いただき、関西地区大学セミナーハウスで開催することになりました。申し込みスケジュールなどは、下記の通りとなっています。皆様奮ってご参加ください。

- 1) 参加最終締め切り7月5日 (延長しました)
- 2) 参加申し込みは4ページのものをご利用になるか、同様の書式でご送付下さい。
(連絡先がメールの場合も、郵便物が受け取れる住所もお書き下さい)

問い合わせ先

STSNJ 夏の学校実行委員長 隠岐さや香

E-MAIL Okisayaka@aol.com

(お申し込みは事務局まで)

申し込み先

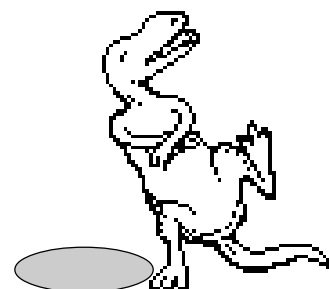
STS NETWORK JAPAN 事務局

〒182 東京都調布市調布ヶ丘1-5-1

電気通信大学情報システム学研究所

小林信一研究室気付

TEL/FAX 0424-43-5666



日程表

7月24日

15:00~ 集合、チェックイン

15:30~17:15 読書会(スタンジェール『科学と権力』松籟社、1999年)
オーガナイズ: 中村征樹(東京大学)

17:15~18:00 松山圭子(青森公立大学) 「語りと医学理論」

18:00~20:45 夕食・入浴

20:45~21:30 川崎勝(山口大学) 「医学医療の人類学」

21:30~ 懇親会

7月25日

7:00~8:30 起床・朝食

9:00~12:00

金森修(東京水産大学) 「ラディカル環境アクティヴィズムの一断片」

中島貴子(東京大学先端研)

「WTO体制下の食品中残留農薬問題に対するSTS的アプローチの可能性」

加藤源太郎(神戸大学)

「将来における科学技術の制御について」か「ポストモダンと知識の再生産」

詳細は未定

春日匠(京都大学) 「社会科学の動員 一誰のために社会は記述されるか?」

12:00~14:00 昼食・散歩

14:00~15:30

藤垣裕子(科学技術政策研究所) タイトル未定

平川秀幸(国際基督教大学) 「なぜ、そしていかにして科学・技術は人文・社会科学の対象になるのか」

15:30~17:00

講演会 シーラ・ジャザノフ(ハーバード大学)

「社会構成主義とはなにか、そのアプローチで科学を研究することの意義やメリットについて(仮)」

17:00~18:00 総合討論

18:00~21:00 夕食・入浴

21:00~ 懇親会

7月26日

7:00~8:30 起床・朝食

9:00~12:00 研究発表会

平岡隆二(神戸大学) タイトル未定

成瀬尚志(神戸大学) タイトル未定

隠岐さや香(東京大学) タイトル未定

閉会の挨拶

12:00解散

STS-NETの閉鎖とメーリングリストへの移行のお知らせ

総会の決定を受けてNIFTYのパティオを利用していたSTS-NETは閉鎖することになりました。

今後は会員のみ参加いただけるSTSNJメーリングリストをたちあげます。登録を希望されるかたは、調 (shirabe@cinfnt.shinshu-u.ac.jp) までメールをお送りください。「手動」で登録いたします。

----- 切り取り線 -----

切り取り線

STS NETWORK JAPAN夏の学校 参加申込み用紙

STS NETWORK JAPAN夏の学校'99に参加します *

氏名(フリガナ) _____ 性別(男・女) *

連絡先(所属先・自宅・Eメール) *

Eメールアドレス (_____)

所属先 _____

〒

Tel. - - Fax. - -

自宅住所：〒

Tel. - - Fax. - -

参加日程 [7月__日の__時頃、[_____]駅/車で]に到着予定です)

宿泊・食事* 宿泊[24日 25日] 食事[24日夕 25日朝 25日夕 26日朝]

発表(する・しない) *

発表される方のみ 講演題目 (_____)

* をつけて下さい。

複数必要な方はコピーしてお使い下さい。Eメールでの申込みも同様の書式でお願いします。

-ワークショップのお知らせ-

「21世紀の科学技術と日本社会－科学技術政策と新たな産官学関係－」

"Science & Technology and Japanese Society in the 21st century

: policy making and a new relationship among the interested branches"

21世紀の日本社会において産官学関係はどうあるべきか。この問いを、科学技術と社会の関係、とりわけ科学技術政策のあり方やその決定過程のあり方、という側面から議論するワークショップを開催します。

発題者には、日本の科学技術・社会関連領域に身をおく研究者や行政官を、コメンテーターには、シーラ・ジャサノフ教授（米国ハーバード大学公共政策）を、そして、ディスカッサントにはスティーブ・フラー教授（英国ダーラム大学社会学・社会政策学）をお招きしております。

欧米圏での科学技術論、科学社会学、科学技術政策論に関して精力的な研究活動を展開されているコメンテーターとディスカッサントの発言をたたき台にして、参加者全員の討論を深めること。そして、21世紀の日本社会と科学技術の関係を、科学技術政策とその決定過程のあり方、そして、新たな産官学関係という視点から展望すること。それがこのワークショップの目的です。皆様の積極的なご参加をお待ちしております。

日時：1999年7月30日（金）午前10時～午後5時30分

場所：東京大学先端科学技術研究センター 新4号館2階講堂

主催：東大先端研、STSNJ、JASTS

使用言語：英語・日本語

発題者

中島貴子（東京大学先端科学技術研究センター助手・科学技術論）

「日本におけるレギュラトリーサイエンスの課題－農薬の人体毒性評価をめぐる日米比較から－」

国吉浩（通産省資源エネルギー庁・公益事業部原子力発電課・企画官）

「日本の原子力政策決定過程の問題点と課題－行政官の立場から－」（仮題）

他数名交渉中

編集委員からのお願い

会員の皆様には、各種情報をお寄せくださるようお願いいたします。

特に、会員の皆様の関わられた出版物、報告書の情報をお知らせください。また、会員消息の項目も充実させたいと思っておりますので、お知らせください。今回も多数の方々から情報を提供していただきました。ご協力どうも有り難うございました。

なお、情報は、事務局宛あるいは、skasuga@mars.dti.ne.jpまでお送りくださいますようお願い申し上げます。

<編集委員・春日 匠>

スティーヴ・フラー氏講演会のお知らせ

「科学の統治： 開かれた社会の未来」(仮題)

日時 1999年7月31日(土) 13:00 - 17:00
場所 東京大学先端科学技術研究センター 新4号館2階講堂
主催 STSNJ

スティーヴ・フラー(Steve Fuller)氏は、「社会的認識論」という研究プログラムのもと、90年代の欧米圏STSをリードするアクティヴな研究者の一人として知られる科学哲学・科学社会学者で、現在は英国ダーラム大学社会学・社会政策学教授を教鞭をとるとともに、学術雑誌SOCIAL EPISTEMOLOGYの創刊・編集を担っております。科学哲学に限らず、一般市民の科学理解(Public Understanding of Science)や科学教育、大学政策などについても広く発言され

ています。また、STSNJ会員である若松征男氏(東京電機大)を中心に開かれた昨年のSTS国際会議での遺伝子治療をテーマにした「コンセンサス会議」や、インターネットをテーマにした第二回コンセンサス会議の動向にも注目され、岩波『世界』2月号に翻訳が掲載された論文「サイエンス・ウォーズ 正確には誰が敵なのか」でも論及されております。

本公演会では、本年末に発売が予定されている氏の新刊GOVERNANCE OF SCIENCE: Ideology and Future of Open Society (Open University Press)の議論を中心に、欧米圏でのSTSの動向や今後の重要課題などについてお話頂く予定です。プログラムの詳細は、現在交渉中ですが、日本側からの報告も含め、これからのSTS研究の展望を描き、意見を交換することを目的としております。

みなさまの積極的な参加と交流の実現を期待しております。

講演会のさらなる詳細情報については、決定次第にSTSNJのメーリングリストにてお知らせします。同リストにまだ参加されておられない方は、これを機に御参加いただくと幸いです。

追記: 恒例の東工大中島研究室公開セミナー「先端科学技術と社会」でもフラー氏を囲んだセミナーが、8月2日に開かれる予定です。こちらも皆様お誘い合わせのうえご来会下さい。

高度情報社会、インターネットを考えるコンセンサス会議の経過

木場隆夫（科学技術庁 科学技術政策研究所）

標記の会議は現在、中盤を迎えています。科学技術と社会の均衡を図るために市民からの意見発信の場を作ろうと企画されているこの会議は、これまでも報告しているところです。

4月に市民パネルの応募を終え、19名の市民パネルを構成することができました。市民パネルが鍵となる質問（この会議で討論する課題）を作るために、以下の3氏に講師となっていただきました。インターネットに関する技術的な専門家として関西大学の名和小太郎さん、社会的な問題に関する専門家として水越伸さん、法的な問題に関する専門家として牧野二郎さんを迎えています。

5月24日から始まり、9月4日に最終報告会（公開シンポジウム）が行われる予定です。場所は、全て埼玉県鳩山町の東京電機大学理工学部鳩山キャンパスです。

5月24日に第一回目の準備会合を行いました。司会の若松征男さん（東京電機大学）から趣旨説明があった後、市民パネルの自己紹介があり、和やかなムードで始まりました。電機大学のパソコン教室で、市民パネルにパソコンでインターネットで何ができるかを体験してもらいました。電子メールのやり取りや、ホームページの探索などを1時間余り行いました。その後、3人の講師（専門家）から説明があり、市民パネルとの質疑応答を行いました。夕方懇親会がありました。

また、6月12日の第二回準備会合では、午前中、マスメディア界から毎日新聞の瀬上さんを迎えて、市民パネルへインターネットで何が可能かについて説明が行われました。その後、4名の講師と市民パネルの間の質疑応答が活発に行われました。

午後2時から、市民パネルは、「鍵となる質問」の作成を行いました。これは、今後の市民パネルの話し合いの方向性を市民自らで決めようというものです。話し合いの途中では多くの質問項目が挙げられましたが、最終的には以下の4項目を中心とすることにしました。

「技術（使い勝手）」 「社会的問題」 「教育」 「悪影響から市民を守る」。

その他に、インターネット先進国である米国の状況についても知りたいという意見が盛り込まれました。これらの項目には枝となる多くの観点が含まれています。

次回7月24日の会合においては、それらの質問に対応可能な専門家、（いろいろな分野、大学、プロバイダ、官庁など）10名程度を招いて、質疑応答を行います。これは公開です。

その次の会合、7月31日には、市民パネルだけで、それらの結果を踏まえ討議し、市民の意見をまとめます（非公開）。9月4日にそれを発表する予定です（公開）。

いよいよ佳境に入ってきています。関心のある方はぜひ、電機大まで足を運びましょう。

STS Network Japan Yearbook・論文投稿規定

STS Network Japanでは、Yearbook'99（1999年度刊行予定）に収録する投稿論文を募集いたします。前回同様、必ずしもアカデミックな基準にこだわらず、読んで面白いオリジナリティーにあふれた論文を求めます。一定の水準を保ったものであることは前提条件ですが、萌芽的な研究のアイデアを大胆にまとめたもの、教育の実践報告なども受け付けます。この趣旨にしたがって、総説論文や、レビュー論文などは掲載いたしません。

なお、Yearbook'99の投稿締切は、1999年7月31日です。ふるってご投稿をお願いします。

STS Yearbook論文編集委員会(1999年1月15日現在)

編集顧問	村上陽一郎（国際基督教大学教授）
委員長	小林信一（電気通信大学助教授）
副委員長	中島秀人（東京工業大学助教授）
委員	小川正賢（茨城大学助教授）
	柴田 清（新日本製鉄先端技術研究所）
	調麻佐志（信州大学助教授）

A.投稿の資格

- a-1 少なくとも1名、STS Network Japanの会員（会費を払っている人）を著者として含むこと。また、非会員の共著者を含む場合、その共著者すべてが、STS Network Japanの精神を尊重すること。
- a-2 投稿は無料です。

B.原稿の審査

- b-1 投稿論文の審査は、論文編集委員会が責任をもって行ないます。委員、もしくは委員会が適当と認める査読者によって原稿を検討し、掲載の可否を決定します。
- b-2 論文編集委員会は、必要に応じて著者に論文の修正を求めることがあります。
- b-3 論文編集委員は、STS Network Japanの総会の議決によって選出します。
- b-4 原稿は必ずワードプロセッサを使用して作成し、下記のあて先にお送り下さい。提出していただくのは、原稿のA4サイズのプリントアウト、図版等、各5部です。原稿の控えのフロッピーは、必ず著者の手元に残して下さい。
- b-5 掲載が決定されましたら、原稿を収めたフロッピーディスクと最終的なプリントアウトを一部お送りいただきます。編集の都合上、Mac OS, Windows 95または98,MS-DOSのいずれかのテキストファイル（特殊な記号を使用せずどのワープロソフトでも読めるいわゆるASCIIファイル）をご準備ください。図版は、写真製版できる形にして別にお送りください。

C.執筆要項

- c-1 原稿は横書きとし、原則として使用言語は日本語とします。それ以外の場合には、事前にご相談ください。
- c-2 原稿の分量は、原則として400字詰め原稿用紙40枚相当の長さを最大とします。この長さには、注、図版等を含みます。なお、図版はA4サイズ1枚（刷り上がりサイズ）につき原稿用紙3枚に換算してください。
- c-3 原稿の冒頭には、表題、著者名、著者の所属とこれらの英訳、およびキーワード（5語以内で日本語を原則とする）を記してください。なお、キーワードは検索の便宜を図るためのものです。
- c-4 原稿末尾には英文要約（300語以内）を付けることをお勧めします。これは、原稿の枚数には含めません。
- c-5 単行本、雑誌の題名は、和漢語の場合は『 』に入れ、欧文書籍の場合にはイタリック体としてください。論文の題名は、和漢語の場合には「」、欧語の場合には‘ ’の中に入れてください。
- c-6 注は本文の中に挿入箇所を算用数字で示し、原稿の最後にまとめて記してください。
- c-7 注で引用する文献は、書籍の場合原則として次のような順序で記載してください。著者名、（編・訳者名）、表題、（欧文書籍の場合は出版地）、出版社名、出版年、引用ページ数（ - ページ、欧文においてはpp. - ）。

例：柴田鉄治『科学報道』、朝日新聞社、1994年、18ページ。

I. ウォーラステイン、川北稔訳『近代世界システム』、名古屋大学出版会、1993年、161-187ページ。

David Aubrey, Oliver Lawson-Dick (ed.), *Brief Lives*, London, Mandarin Books, 1992, pp. 27-31.

c-8 論文からの引用の場合は、著者名、表題、雑誌（書籍）名、巻、刊行年、引用ページの順に記載してください。

例：山田太郎「若者の自然科学に対する意識」、『日本物理学会誌』、67(1998)、23-24ページ。

John Mulkay, 'Hope and Fear for Science', *Social Studies of Science*, 28(1999), pp. 1-8.

c-9 同一の文献を再度引用する場合には、下記を参考に表記して下さい。同一著者の同一年の複数の文献を引用している場合には、a,bなどで区別して下さい。なお、どれがa,bなどに該当するかは、最初の引用の際に定めて下さい。

例：山田太郎（1998年）、18ページ

Aubrey (1992), p. 15.

Mulkay (1999a), pp. 211-212.

c-10 適当な漢字表記のない外国の地名や外国人名はカタカナで記し、（ ）の中に原綴をおさめてください。なお、これはあくまでも原則ですので、不明の場合にはお問い合わせ下さい。

c-11 最終的な原稿（掲載決定後）では、イタリック体の指定は下線を、ボールド体の指定は下波線を、赤色のボールペン等で記入してください。

c-12 年号の表記は原則として西暦としますが、西暦以外の年号を使用する場合には、1976（昭和51）年のように、西暦に続けてカッコ内に示してください。

c-13 図版はそのまま写真製版できるものを用意し、挿入箇所がはっきりと分かるように示してください。なお、著作権上図版の使用許諾が必要な場合には、原稿の執筆者が原典の著作者からあらかじめ許諾を得てください。

D. 著作権の帰属

d-1 掲載原稿の著作権は、STS Network Japanに帰属します。ただし、著作者の人格権に所属する部分は、著作者に留保されます。

d-2 Yearbookの掲載原稿の別刷は作成しませんが、著者に限り、著者の関与した部分の複製を20部まで自由に作成することができます（共著者がいる場合には、著者数×15部までで最大50部を超えないこと）。

E. 原稿の送り先・問い合わせ先等

e-1 〒177 東京都練馬区関町南1-2-24 中島秀人

（投稿原稿であることが分かるように、封筒に明記してください）。

tel 03-3928-9217 /e-mail MAG02214@nifty.ne.jp

e-2 Yearbook '99論文投稿締切 1999年7月31日 消印有効。

STS情報

事務局会議

今回の事務局会議を、以下の通り開催します。

日時 7月2日(金) 12:00 -
場所 東大先端研 13号館 2階セミナー室

議題は、以下を予定しています。

- (1)夏の学校 準備状況
- (2)秋のシンポジウム テーマ等
- (3)Jasanoffワークショップの件(準備状況/記録等)
- (4)パンフレット改訂について
- (5)名簿発行の状況
- (6)ニューズレター関連

急な告知になり、申し訳ありませんが、お時間のある方は、是非、参加いただけますと幸いです。

また、議題に関して、その他、気が付かれた点がありましたら、ご指摘いただけますとありがたいです。

以上、よろしく申し上げます。それでは。

開催状況

梶 雅範氏より

第24回 科学技術社会論研究会
テーマ「化学史の通史をどのように記述するか」

今回文部省が発表した新学習指導要領によれば、科学史を通して理科を教授しようとする「理科基礎」という科目が高校理科に新設されました。指導要領が実施されたときにどのくらいの高校で実際に採用されるかという問題はあるにしろ、そうした科目新設は、中等教育でも科学史に一定の役割が果たしうることが認められたことを意味します。科学史学会でも真剣に受け止められて、先頃開かれた学会の年会でも「新学習指導要領と科学史の教材化」というシンポジウムが開かれました。

一方、化学史内でも変化が見られます。1960年代以降、化学史の個別研究はずいぶん進んだものの、パーティントン(J. R. Partington)、アイト(A. J. Ihde)以降ながらく通史は書かれませんでした。それが90年代に入ってたつづけに通史本(D. M. Knight, W. H. Brock, B. Vensau de-Vincent)などが刊行されました。化学史でも新たな通史が要請される時期に来ているということでしょう。

今回は、こうした化学史界と科学教育界の新動向を念頭に、化学史通史を4回で描くとしたら、なにを取り上げどのように描くべきか考えてみたいと思います。幸いにして、化学史を専攻する中堅の4人を集めることができました。そもそも「科学技術社会論(STS)」の重要な構成要素として科学史と科学教育がありました。ですから「科学

技術社会論」研究会は発表の場の一つとしてふさわしいかと思えます。広い見地で議論していただければと思います。(文責:梶 雅範)

日時 1999年7月10日(土) 午後1時 - 6時
場所 東京大学先端科学技術研究センター
13号館 2階セミナー室

1:00-2:00: 脇岡義人 17世紀-18世紀:近代化学の成立
2:00-3:00: 吉田晃 19世紀の有機化学の発展
3:20-4:20: 梶 雅範
19世紀の無機化学の展開:周期律と化学元素概念
4:20-5:20: 菊地重秋 20世紀における量子化学の成立
5:20- 全体討議と次回の打ち合わせ

東京大学先端科学技術研究センター
最寄り駅は、小田急線 東北沢駅または、
井の頭線 駒場東大前駅および池ノ上駅です。

本研究会についてのお問い合わせは、下記事務局までお願いいたします。

国土館大学 政経学部 木原英逸
195-8550 町田市広袴町 1-1-1
TEL 0427-36-8127/8120, FAX 0427-36-8139
E-mail kihara @ pem.kokushikan.ac.jp

柿原泰氏より

日本産業技術史学会 第15回年会・総会
日時:1999年6月18日(金)~20日(日)
場所:北海道・赤平市文化会館

プログラム:

18日(金) オプショナルツアー(室蘭市)
日本製鋼所室蘭製作所見学など
19日(土) 学会(赤平市)
一般講演(9:00~11:45)
山田大隆(札幌開成高等学校)
空知産炭地活性化としての石炭産業遺産調査
山田大隆/長渡隆一(日本ナショナルトラスト)/大石道義
(西日本短期大学)/池森寛(西日本工業大学)
志免炭鉱の歴史と立坑遺産
安田孝(摂南大学)
炭鉱町の形成と保存に関する国際比較
石井太郎(上越教育大学大学院)/石田文彦(上越教育大学)
明治・大正期における石油工業の発展過程(1)
石田文彦(上越教育大学)/石井太郎(上越教育大学大学院)
明治・大正期における石油工業の発展過程(2)
大島聡範(苫小牧高専)/熊田有宏(日鋼検査サービス)
日本製鋼所室蘭製作所における発電用タービン軸材大

型化の技術

宮木慧子（九州産業大学）

陶磁器産業とワラ包装技術の関連について

石村真一（九州芸術工科大学）

台鉋の分類化

渡部昭典

米国産業革命の展望 I 革命期間

柿原泰（日本学術振興会特別研究員）

大西洋横断海底電信と実験室教育の勃興

堤一郎（日本労働研究機構・研究所）

火兵学会の誕生と初期の活動

学会賞発表・受賞記念講演など（13:00～14:00）

シンポジウム（14:10～16:30）

「日本エネルギー史と石炭技術史」

司会：中岡哲郎（前会長、大阪経済大学）

パネリスト：

親松貞義（赤平市長）

石炭の盛衰とともに歩んだ炭鉱都市

吉田勲（住友石炭赤平事務所）

住友赤平立坑と関連資料の保存と現況について

山田大隆（札幌開成高校）

日本エネルギー史における北海道石炭史の特徴と今後の石炭技術

コメンテーター：後藤邦夫（会長、桃山学院大学）

総会（16:40～17:50）

20日（日）見学会（赤平炭鉱遺産及び近隣産炭地ツアー）

住友赤平立坑見学、歌志内・空知炭鉱遺構見学、

上砂川町・JAMIC無重力センター見学、

北炭万字炭鉱遺構見学、

夕張炭鉱、北清水火力発電所など

東工大中島研究室公開セミナー

「先端科学技術と社会」第30回研究会

科学技術の高度化は、それを受容する社会との間に、数々の解決すべき課題を提起しています。セミナー「先端科学技術と社会」では、この問題に関わる刺激的な話題の提供者をお招きし、年間約10回のペースで研究会を開催しています。例会の第30回は下記のごとくとなりましたので、ご案内いたします。ふるってご参加ください。終了後には、恒例の懇親会を開きます。

日時：1999年6月29日（火） 17：30～20：00

演題：シチュエーション・コンピューティング

人から発想する新たなコンピューティングの可能性

講師：前川秀正氏（株式会社富士総合研究所研究員）

会場：東京工業大学百年記念館・第 会議室

東急目蒲線もしくは大井町線大岡山駅下車

（正門を入れてすぐ右側の建物）

世話人：東京工業大学 中島秀人

東京大学先端科学技術研究センター 大谷卓史

連絡先：〒152-8552 目黒区大岡山2-12-1

東京工業大学大学院社会理工学研究科 中島研究室

tel/fax 03-5734-3255

e-mail: nakajima@mail.me.titech.ac.jp

115th 科学・技術と社会の会のご案内

今回は、松山圭子氏をお招きし、話題を提供していただきます。松山圭子氏は、東京大学先端科学技術研究センターにおいて科学（・医学）報道に関する博士論文を書かれた方です。当日は興味深いお話が伺えるものと期待されます。

なお、本研究会はオープンなものですので、ご関心をお持ちの方がいらっしゃれば、お誘い合わせのうえふるってご参加ください。

日時：1999年6月10日（木） 6:00PM～8:00PM

（7:00PMになると正面玄関の鍵が閉まってしまうのでご注意ください）

場所：〒113-0033 文京区本郷 7-3-1

東京大学社会科学研究所 1F 中会議室

話題提供者：松山 圭子氏（青森公立大学）

テーマ：「「コレステロール」を語る医学の言葉、メディアの言葉」

* 1999年度年会費3000円の納入をお願い申し上げます。

年会費を納入された会員の方には、年報『科学・技術・社会』第8巻（1999年7月刊行予定）を送料無料で出版社より直接お手元にお送りさせていただきます。

* 入会ご希望の方は、下記事務局まで、お名前、住所、電子メール・アドレス、所属、関心領域をお寄せください。転居なされた場合も、事務局へご連絡ください。

科学・技術と社会の会事務局

柿原 泰

E-mail: kakihara.yasushi@nifty.ne.jp

文献情報

小林信一氏より

Democratising Technology-Theory and Practice of Deliberative Technology Policy

Edited by Rene von Schomberg, published by the International Centre for Human and Public Affairs (ICHPA), Hengelo, The Netherlands, 125 pages.

ISBN 90-802139-6-9; 19,90 EURO, order by fax +31-74-2918697

(publishers mail-adress: ICHPA, Loweg 19, 7553 DA Hengelo,

the Netherlands)

Bookdescription:

With this volume a range of international authors contributes to an ongoing debate on the conceptual and practical development of a deliberative technology policy. Such a technology policy should bring the realm of technological innovation within the scope of democratic decision making. Deliberative technology policy seeks the right balance between, direct public participation which contributes to the legitimacy of the policy process, and the quality of the policy process which can be safeguarded by an appropriate mediation of science and policy.

Table of Contents

Introduction

1. Escaping the iron cage, or, subversive rationalization and democratic theory

by Andrew Feenberg (San Diego, State University)

2. Design Criteria and political strategies for democratising technology

by Richard E. Sclove (Loka Institute, USA)

3 Why the public should participate in technical decision making
by Carl Mitcham, (Penn State University)

4. Democratizing technology or technologizing democracy- the case of agricultural biotechnology in Europe, by Les Levidow (Open University, England)

5. Environmental research between knowledge and organisation,
G. Bechmann (Institute for Systems analysis, Karlsruhe, Germany)

6. Technology Assessment in a deliberative perspective
by Ole Brekke and E. Erikson (Bergen, Norway)

松山圭子氏より

次の訳書が、本年4月、出版されました。

レネイ・C・フォックス ジュディス・P・スウェイジー著

森下 直貴、倉持 武、窪田 俊、大木 俊夫 訳
「臓器交換社会 - - アメリカの現実・日本の近未来 - - 」

ついこの間まで言われていた「何故、日本では脳死体からの臓器移植が行われないのだろう」とは全く逆の「何故、アメリカでは臓器移植がさかんに行われるのだろう」という視点から書かれた本のようなのです。(実は、まだきちんと読んでいない。(-_-;)

臓器移植とモルモン教との意外な結びつきなども論じられています。(人工心臓の手術の第1例はユタ大学で、モルモン教徒の元歯科医に行われました。)

さて、この本の訳者あとがき(浜松医大の森下さん)には、「STS」が出てきます。

著者の一人のスウェイジーさんのことをSTSの専門家

と紹介していますし、次のようにも書いてあります。

>>たとえば、原子力発電所をめぐる科学技術問題をとってみれば、同じことが

>>言えます。(「同じこと」とは、限界のある、あるいは問題の多い科学技術な

>>のに、ブレーキがかけられないことを指す：松山)ブレーキをかけられない理

>>由と文化的な背景を明らかにするという重要な仕事を、社会科学・文化人類学

>>STS畑の研究者にぜひとも期待したいと思います。

中島秀人氏より

名和小太郎『デジタル・ミレニアムの到来――ネット社会における消費者』(丸善) 760円

ユニバーサル・サービスの概念から情報倫理までカバーする本です

梶 雅範氏より

化学哲学のメーリングリストに。今年から発行のはじまった化学哲学雑誌の第2号の近刊案内がありました。

(Philosophical Historical and Interdisciplinary Studies of Chemistry) Volume1, Issue 2, June 1999

Editorial 2, Eric R. Scerri, pp. 107-109

On the Neglect of the Philosophy of Chemistry, J. van Brakel, pp. 111-174

The Use of One-Electron Quantum Numbers to Describe Polyelectronic Systems, Robert M. Richman, pp. 173-181

Why are Chemists 'Turned Off' by Philosophy of Science?, Robert J. Good, pp.185-215

Athel Cornish-Bowden, ed., Eduard Buchner and the Growth of Biochemical Knowledge, Bo G. Malmstroem, pp. 217-219

会費納入について

このニュースレターが入っていた封筒のラベルに関する説明

お名前の右下に、会費の支払い状況などを示しております。例えば、

「**98,99未**」と「**99未**」は、それぞれ該当年の会費（3500円）が支払われていないことを表します。前者に該当の方は、今年度中に会費のお支払いがなければ、それをもって脱会の意志表明と受け取らせていただき、以後Newsletterの発送を中止します。

「**9 9不足**」は、お支払いいただいている会費が3500円には不足しているもので、「不足」の後の数時が不足金額を表わします。お手数ですが差額分お支払いください。

「**臨時**」は、「夏の学校」への参加者など、何らかの理由でSTS Network Japanに関係がある方に、臨時にお送りするものです。この期間は通常1年間です。送付が始まって1年以内に入会の手続きをとられなければ、以後Newsletterの送付を停止させていただきます。

STS Network Japan 公式ホームページ

97年度の総会での決定を受けて、STS Network Japanの公式ホームページが開設されました。

会員に向けた活動計画の迅速な告知と、非会員への活動内容の宣伝が当面の目標です。当面は、NLに掲載された記事などは極力掲載する予定です。NLに投稿される方は、あらかじめご了承ください。

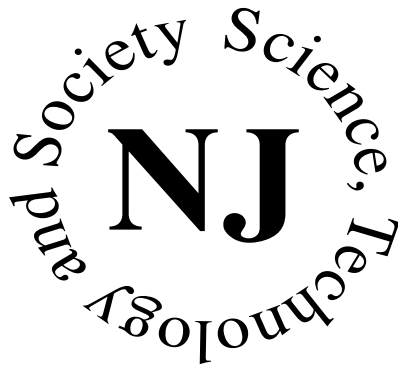
方針は、今年度末の総会で継続することが決定しました。今後とも、みなさまのご意見、ご批判をなるべく多くいただければと考えています。

なお、当面管理は広報担当の春日がおこないます。

ご意見は、事務局あるいは春日までいただければ幸いです。

URL<<http://kob.is.uec.ac.jp/sts/>>

広報 春日 匠<skasuga@mars.dti.ne.jp>



編集後記

今回は夏の学校も近いのでお知らせのみと言うことで失礼します。
次号の記事は充実させますので、乞うご期待、です。
それでは、夏の学校でお会いしましょう。

K.S.

Newsletter Vol.10, No.2 (通巻No.35)
1999年7月1日発行

編集

STS NETWORK JAPAN 事務局
Newsletter編集委員会

代表 中村 征樹 / 委員 春日 匠

発行

STS NETWORK JAPAN
代表 中村 征樹

STS NETWORK JAPAN 事務局

〒182 東京都調布市調布ヶ丘1-5-1

電気通信大学情報システム学研究科

小林信一研究室気付

TEL/FAX 0424-43-5666

E-mail: sts@kob.is.uec.ac.jp

WebSite: <http://kob.is.uec.ac.jp/sts/>

郵便振替口座 00170-1-63708

加入者名 STS NETWORK JAPAN